

牧田諦亮著

『疑經研究』

岡部和雄

一

「タトヒ偽經タリト云フトモ、正直ニシテ

如来ノ金言ニ背カズンバ、是レヲ用ルニ何レノ不可アランヤ」と述べたのは、江戸時代に活躍した浄土宗の学僧松誉巖的である。かれは『血盆經和解』七巻を著わしたが、その中で血盆經は中国・日本の大藏經に入藏された形跡がないから偽經だとする非難に答えたのが右の一節である。經説の内容が仏説に違背することがなければ、たとえそれが偽經であってもこれを依用して不都合はないという見解を抱いた学僧は、中国・日本を通じてもちろんかれひとりにとどまらない。しかし翻訳されたものでないことがはっきりしている經典にも、それなりの価値を認めるといふ主張は、いつも少数意見でしかなかった。仏教界

の大勢はいつの時代であれ大藏經こそ仏説の源泉であり基準であるという考えを堅持してきたことは疑いない。

近代以前の社会では、生れや素姓、由緒の正しさなどをやかましくいったが、これは人間についてだけではない。經典でも同じことである。由緒正しからず、素姓のはっきりしない經は、卑しい經であり、とるに足りない經であり、ある場合には気味の悪い、したがって危険な經でさえある。この場合の由緒や素姓のきめ手となるものは、大藏經の目録に翻訳經として記載されていること、しかも実際に大藏經中に収められていることである。目録にもその名をとどめず、大藏經にも収められていない經は、したがって正体不明の問題とするに足りないニセの經ということになる。經の内容はどうであれ、ニセの經は卑

しい經にはかならない。かくして仏教界の伝統的な、したがって支配的な見解は、偽經や疑經に決して好意的でなかった。松誉が血盆經に七巻もの注解をかき、偽經も内容次第だと述べたことはその意味でやはり異例のことだったといわねばならない。

ところで、牧田博士が疑經の研究に着手するひとつのきっかけとなったのは、この『血盆經和解』との出会いであった。著者の述懐によると、昭和三十年五月十日たまたま京都の其中堂で正徳三年（一七一三）の刊本を見つけ購入したという。その翌々年にはスタン本敦煌寫經類の写真が博士の勤務する京都大学人文科学研究所に備えられるに及び、中国仏教史の研究にとって疑經研究がいかに重要であるかを痛感するに至ったという。博士の疑經研究はおそらくこの時期から開始されたと思われるが、それにつけても、博士のその後研究に大きな方向づけを与えることになったのが、『血盆經和解』という日本の、しかも江戸時代の著作であったことは興味ぶかい。『疑經研究』の最終章がこの松誉巖的の疑經觀の研究に当てられていることにも、松誉への傾倒ぶりがうかがわれる。

二

『疑經研究』は著者が昭和五十一年三月に京都大学人文科学研究所を退官するに当ってこれまでの疑經に関する研究論文を集成し一書にまとめたものである。疑經研究は同研究所における著者の個人研究のテーマであり、研究業務に忙殺されながらも、寸暇を得ては研究を続けてきたという。周知のごとく、牧田博士が参加しあるいは主宰した同研究所、中世思想史研究班の業績は『肇論研究』『慧遠研究』（二冊）『弘明集研究』（三冊）として刊行され、学界を大いに裨益している。このような輝かしい共同研究の成果に加えて、このたび個人研究の研究報告として『疑經研究』という大冊を立派にまとめあげられた。博士の日頃のご精進とご労苦に対して深い敬意を表するものである。

著者は本書について、研究はまだ継続中であるから中間報告にすぎないと謙遜されている。しかしのちに紹介するように、本書の研究は従来の疑經研究に新しい地平を拓いたものである。とくに本書の第一章は疑經撰述の思想的背景に鋭い分析を加えるとともに、疑經研究の今後をも広く展望したものととして、

まさに一時期を画する新研究というに値する。新しい中国仏教史がかけられるとすれば、本書の成果を無視できないであろう。もっとも個々の疑經に関する個別の研究ということになれば、なお今後にまつべきものが少なくない。著者がさらに本研究を発展させ、第二、第三の疑經研究をまとめられることを期待するとともに、本研究が新しい刺激となつて疑經研究者がさまざまな視角から研究を展させてくれることが切に望まれる。

本書の紹介に入る前に、本書の構成について一言したい。本書は十五章からなり、その多くはかつて独立の論文として研究誌等に発表されたものである。著者の長年にわたる研究のあとをふりかえる意味で、各章の初出の誌名・号数・年度を（ ）内に示す。

第一章 中国仏教における疑經の研究（東方学報第三十五冊、昭39）

第二章 中国仏教史と疑經——中国仏教史に對する疑問——（三蔵、国訳一切経月報45・46・47号、昭47）

第三章 北魏の庶民經典（横超慧日編、北魏仏教の研究、昭45）

第四章 提謂經と分別善惡所起經——真經と疑經——（仏教大学大学院紀要、創刊

号・第二号、昭43）

第五章 觀世音三昧經の研究（仏教大学人文学論集一、昭42、のちに六朝古逸

觀世音心驗記の研究、昭45に所収）

第六章 淨度三昧經とその敦煌本（仏教大学研究紀要三七、昭35）

第七章 高王觀世音經の出現（仏教史学十

二—三、昭41、のちに六朝古逸觀世音心驗記の研究、昭45に所収）

第八章 大通方広経管見

第九章 仏説像法決疑經について（結城博士頌壽記念仏教思想史論集、昭39）

第十章 敦煌本要行捨身經について（西域文化研究第六、歴史と美術の諸問題

昭38）

第十一章 善惡因果經について

第十二章 三厨経と五厨経——仏教と道経の混淆について（聖徳太子研究第二

昭41）

第十三章 ニンマ派の埋蔵經典について

金子英一稿

第十四章 正倉院文書に見える疑經類

第十五章 松誉巖的の疑經觀

このうち第八、十一、十四、十五の四章については評者の調査が及ばなかったが、ある

いはこのうちのいずれかは既発表の論文かも知れない。いずれにしても本書には著者が長い年月をかけてひとつひとつ丹念に研究を積み重ねてきた努力の成果が凝縮されていることになる。

三

第一章は本書の総論に相当する。前掲のごとくこれは東方学報第三十五冊に「中国仏教における疑經研究序説—敦煌出土疑經類をめぐって—」として発表されたものである。いまから十数年も前に、著者が疑經類の全体に目を配り、それにもとづいてかくも正確な分析と展望を持ち得たことは驚嘆すべきことである。なぜなら、この論文は本書の第一章に編入されるに当たっても、若干の資料的な増補（四十九頁十二行目～六十頁一行目、六十九頁十九行目～七十二頁八行目、七十六頁三行目～七十七頁十七行目、七十九頁六行目～八十四頁十六行目）がなされているほかは、論文の要旨に全く訂正または変更が施されていないからである。またこの初出の論文には、本書所収の三篇の論文（第六、九、十章）への言及がなされているから、少なくともこれら三篇は、本論文執筆以前に成ったものである。

しかし本論文には、『疑經研究』で独立の章を立てて個別に論じられているほとんどの經について、すでに研究ないし研究の見通しが、簡潔ではあるが実に正確に記述されている。したがって本論文を執筆する段階ですでに、主な疑經についての大きな検討は完了済みだったのかも知れない。いずれにしろ東方学報所載の長大な論文は、疑經に関心を寄せる研究者にとって逸することのできない研究の貴重な指針であった。その点はこんにちでも全く事情は変わっていない。このたびこれが『疑經研究』の第一章に編入され、より利用しやすい形で提供されたことは学界にとつてこの上ないよるこびである。（本書三十六頁十一行目の「…このことは、この時代の長安への藏經整理の基準が中国本土における場合と同様であったことをものがたる」は文意が不明瞭である。旧論文を参照するとこの部分は「…このことは、この時代の長安への經藏補充の申請が、開元録に準拠していることを示し、藏經整理の基準が…」となっている。傍点を施した二十三字が脱落していることになる。単純な校正上のミスと思われる。）なお、旧論文には文中に多数の敦煌写經の図版が掲載されていたが、『疑經研究』ではこ

ごとく削除されている。おそらく印刷や費用などの点で、やむを得ない処置だったと思われるが、本文中には写經の書風や書体のことも論じられているから、参照の便のためにぜひ残してほしかった。本書の巻頭に新たに付された図版（觀世音三昧經、善惡因果經、大報父母恩重經）は珍重すべきものに違いないが、別掲であることもあって、本文の理解にはそれほど役だっていないように思う。

四

前置きが長くなったが、本書第一章の紹介に移りたい。著書はまず敦煌文献の研究・整理が着々と進み、ジャイルズの目録をはじめとする各種の文献目録が刊行され、とくにスライントラックについては日本にいながらにして写真閲覧ができるようになった現在、疑經研究の分野でも望月・矢吹両博士等によるかつての先駆的業績を凌駕する新研究がいまや可能になったとし、また従来閑却視されてきた中国における民衆仏教解明のためにもそれが切に求められていることを力説する。著者のいう疑經が、偽經をも含む広義の概念であり、没価値的に表現すれば中国撰述經典ともよばれるべきものを指すことはいうまでもない。

従来の研究がともすれば疑經か否かの判定・弁別を主としてきたのに対して、疑經が何故つくられたか、誰がその担い手であったか、どのように流行したか、なぜ散佚したか等の解明こそ今後の疑經研究の課題である。著者は少数の例外はあるにせよ、敦煌出土疑經類のほとんどは中国本土で書写されたものと見なし、従ってその解明によって得られるものは、敦煌仏教の様態ではなくて中国本土の仏教、とくに江南や長安・洛陽を中心とする広い仏教圏の種々相であると見る。そして疑經研究がすぐれて中国仏教史研究に資する領域は、社会の底辺にまで滲透した仏教、すなわち民衆（著者は民衆の代わりに庶民という言葉も使う）の仏教にほかならないという。著者は第一節で疑經研究の意義をこう指摘したあとで、諸疑經における疑經の記載を精査し、とくに各疑經撰者の疑經観に注意をほらいながら、真經と疑經がどのように区別されてきたかを論ずる。それが第二節のテーマとなる。ここでは道安録、僧祐録、法疑錄、内典録、大周録、開元録がそれぞれ個別にとりあげられ、各撰者の疑經に関する見解、各疑經録の内容、収録された疑經の經名・部数・卷数などが詳しく検討されている。各疑經の

記載を単純に羅列するのではなく、他の著作に引用された疑經の佚文はもとより、必要があれば敦煌写經や日本に残存する古写經にも言及がなされており、とくに研究に値する疑經（これらの疑經の主なものについてはのちに独立の論稿が生まれた。本書の各章参照）については簡単なが問題点が要約されている。疑錄の撰者たちが真經・疑經を判別する基準は、翻訳經か否かの一点にかかっている。この点に疑問があれば疑經と見なされる。道安録以来、疑經と判定されたものは年を追って増加し、開元録にいたっては四〇六部一〇七四巻にも達した。開元録の入藏録は一〇七四部五〇四八巻であるから、これと対比しても部数にして四〇〇部、巻数にして一〇〇〇巻をうわまわる疑經群の存在はわれわれを驚嘆させるに充分である。もっとも諸疑錄の判定がすべて正しかったわけではない。個々の疑經についてそれを真經とするか疑經とするかの判定権は各疑錄撰者がそれぞれ持ちあわせていたが、その判定そのものに少なからぬ問題が存する。たとえば開元録が真經と判断したものの中にも、明らかに翻訳經であることの疑わしい疑經が現に存在している。それらの疑經は現在の大藏經の中にまぎれこん

で伝えられている。望月博士らによるかつての疑經研究は主としてこれらの摘発に終始したが、これもまた確かに疑經研究の重要な課題であった。著者はこの節の最後に各疑錄の疑經数を比較して挙げているが、さきの判定基準のあいまいさを考慮に入れながら、この数字を絶対視すべきでないとしている。

第三節では開元録所載の疑經群をとくに扱っている。開元録が新たに集めた疑經（偽妄乱真經）は三十七部五十四卷あるが、この中には達摩禪の流行と関連を有する禪門經（これについては、柳田聖山教授の研究がある。『塚本博士頌壽記念仏教史学論集』所収）や

妖徒の偽造として勅命で禁じられた弥勒下生関係の四つの疑經などが含まれる。この弥勒下生信仰にもとづく四疑經は敦煌写經にも見いだされず、残念ながらいかなる点が危険思想と見なされたのか知りうべくもない。瑜伽法鏡經と要行捨身經も開元録初出の疑經であるが、この二經（および仏名經）には智昇が異例とも思える詳しい注記を施している。前者は三階教の僧、師利の手になり、像法決疑經（本書第九章参照）ほか二疑經にもとづく疑經である。後者（本書第十章参照）については開元録が四つの理由を挙げてこの疑經が何故

に疑經とされるかを強調し口をきわめて攻撃している。なお本經のスタイン本の一つに開元録編纂の前年に当る開元十七年の奥書を有するものがある。これは開元録當時いかにこの經が流行していたかを知りうる貴重な資料である。このほかには仏名經十六卷（これについては井ノ口泰淳教授の研究がある。東方學報三十五冊）もそのひとつに数えられる。同じ疑經でも疑惑再詳録に新たに加えられた一經としては、三厨經（本書第十二章参照）がある。

五

第四節では敦煌文献に見る疑經群を扱う。まず著者は敦煌出土の目録類（スタイン本の二〇七九号、二一四二号、三六二四号など。これらはおそらく特定寺院の入蔵目録であつたらう）を調査し、それらに疑經類の目録化はほとんどなされていないことを確かめる。もつとも、二〇七九号には新翻經目録中に占察善惡業報經、如来在金棺囑累清淨敬福經の二疑經を含むが、これは著者のいうように、この目録が扱った経録がすでにこの二經を真經または新翻經として扱っていた可能性がある。またスタイン本二一四〇号は遺失の經の

補充について沙州から長安の方に依頼した書状の控えであるが、この申請経目には紙数が記されている。興味ぶかいのはこれが開元録の紙数と一致することで、このことから敦煌地方の經藏といえども開元録の入蔵録に準拠していたことが知られる。寺院の入蔵目録に疑經の記録がなく、しかもその目録は中国本土の目録に依存するという状況であつたのに敦煌の石室に大量の疑經群が埋もれていたことについて、著者はこれらの疑經は寺院の經藏とは別個のところに、すなわち人間の經藏にあつて庶民の帰信を勝ち得ていたと推定する。おそらく著者の指摘する通りであろう。

またこれらの龐大な疑經類が何故書写されたのかという問題もきわめて重要であるが、これを知る手がかりは写經に記された願文である。著者は大通方広經（本書第八章参照）のスタイン本四五五三号、救疾病經のペリオ本四五六三号等の願文を例に引きながらこの問題を考察し、庶民が写經にこめた願に関して真經・疑經の区別は全く存しないとする。庶民信仰のレベルでは真經も疑經もなく、あるのはありがたい仏經だけだったことにならる。仏經を翻譯經のみに限ろうと腐心した経録撰者たちの經典觀との間に何と大きな懸隔

があることか。ところで、スタイン本、ペリオ本にはあわせて二十種近い経録未載の疑經を含むが、これらとて敦煌ないしその付近でつくられた疑經とは見なしがたい。著者はその一例として、多数の写經の存する仏說解百生怨家陀羅尼經について書写の形式を分析し単行のものは唐代に中国本土で、連写のものは十世紀ごろ敦煌で書写されたとする。さらに経說から見て六朝末に中国本土で成立したと推定する。かくして敦煌疑經類については、経録記載の有無を問わず、その成立は敦煌の地ではなく中国本土と考えるべきであるという結論に達する。ここから、疑經研究は広く中国仏教史の研究に寄与するものであつて、それによって敦煌仏教の特殊性を云々するのは早計にすぎるといふ著者の見解が自然に導かれてくるのである。これにはいわずに敦煌學に対する著者の批判や不満がこめられていられると思われる。

六

第五節では疑經撰述の意義を論ずる。何故にこれほど大量の疑經がつくられたか、またつくられる必要があつたか。この点の解明が充分になされなければ、疑經研究は単なる文

献研究に陥り、中国仏教史を新しく把えらるという大事な視点を見失なうことになる。疑經撰述の意義を明らかにすることは、疑經を思想史のレヴェルで問いなおすことにほかならない。もちろんこれには綿密な個々の文献研究の蓄積が前提されなければならない。この点に関する著者の用意はまさに周到というべきである。著者は疑經撰述の意義について次の六分類を試みる。

- (1) 主権者の意に副わんとしたもの。
- (2) 主権者の施政を批判したもの。
- (3) 中国の伝統思想との調和や優劣を考慮したもの。
- (4) 特定の教義信仰を鼓吹したもの。
- (5) 現存した特定の個人の名を標したもの。
- (6) 療病迎福などのための単なる迷信に類するもの。

この六分類は、かつて望月博士が教理的区分を主としてつくった五分類をも参考にしたようであるが（本書第二章、中国仏教と疑經、一一七―八頁参照）、疑經撰述の主体性を重視してつくったこの六分類がすぐれていることは論ずるまでもない。

まず(1)主権者の意に副わんとしてつくられた疑經の典型として大雲經と仏説宝雨經をあげ

る。二經とも武周革命に資するためにつくられた。この場合の主権者とはいうまでもなく則天武后である。大雲經については矢吹博士の『三階教の研究』に詳しい研究がある。

(2)主権者の施政を批判した疑經には、多くの三階教の典籍やそのよりどころなつた像法決疑經、瑜伽法鏡經が代表的なものであるが、さらに仁王般若經と梵網經を加えることができよう。前者については、さきの矢吹博士の研究、後の二經については望月博士の研究が名高い。

(3)中国の伝統思想との調和や優劣を考慮してつくられた疑經は数多く存するが、儒教の孝倫理との調和を計った父母恩重經、孟蘭盆經がとくに有名である。また儒仏道三教の優劣論争の中からおそらくつくられたと思われる疑經としては須弥四域經、清淨法行經などがある。なお、この『疑經研究』にはこの項の末尾に新しく次の三つのテキストを付載する。仏説父母恩重經（ペリオ本二二八五号）、仏説父母恩重胎骨經（高麗刊本）、仏説父母恩難報經（北京図書館本）。

(4)特定の教義信仰を鼓吹した疑經は觀音信仰、地藏信仰をはじめ種々のものを数えうるが、ここでは仏説般泥洹後比丘十變經、大通

方広經、觀世音三昧經、救苦觀世音經、念仏超脱輪廻捷徑經の五經について略説される。

このうち般泥洹後比丘十變經は、仏入滅後、比丘の戒行は次第に衰退墮落し、千三百年後は仏法が消滅すと説く。著者は、末法当来がささやかれた六朝末期の仏教界の現実が反映されていると見る。大通方広經は一種の仏名經ともいえるもので、三世十方諸仏の名号を唱える功德によって懺悔滅罪し成仏すると説く。六期末にはこの經にもとづく方広懺悔が行なわれるほど流行した。多数の敦煌本があり、日本にもその下巻が天平写經として伝えられている。觀世音三昧經は觀音信仰にもとづいてつくられた疑經のうちで代表的なもの。天台智顛の觀音玄義にも引用がある。スライ本（四三三八号）その他の敦煌本が知られるが、日本にも守屋本（京都国立博物館蔵）中に重文の指定をうけた逸品が存する（本書巻頭図版を参照。なお大通方広經、觀世音三昧經についてはそれぞれ本書第八章、第五章参照）。救苦觀世音經も觀音信仰にもとづく疑經であるが、これには浄土往生や五道大神・閻羅大王なども説かれる。著者はこの經をかなり遅く、おそらく唐末ごろにつくられたと見る。念仏超脱輪廻捷徑經は浄土教

の中でつくられた一種の日用儀礼の手引書で、疑經の中でもきわめて新しいもの。続蔵本として現存するがその流伝は不明である。『疑經研究』には続蔵本から本文を転載している。なお、念仏超脱輪廻捷徑經に関する記載は今回、『疑經研究』が増補した部分のひとつである。

(5) 現存した特定の個人の名を標した疑經としては高王觀世音經、僧伽和尚入涅槃說六度經、勸善經の三經をとりあげる。高王觀世音經の高王とは東魏孝靜帝のとき宰相をつとめた高歡(四九六―五四七)である。かれが誦經千遍の靈驗に感動し上表してついに冤罪者の死刑を免がれさせたところから、この經名が生れたとされる。このエピソードは魏書の盧景裕伝にもとりあげられるほど有名なもので、本經の影響もきわめて大きかった(本書第七章参照)。僧伽和尚欲入涅槃說六度經は觀音の応化身と崇められた僧伽和尚(六二八―七一〇)の説に帰せられる疑經である。勸善經は一種の厄除けの護符のような短經で、実在の宰相賈耽(七三〇―八〇五)の名が記されている。なお、僧伽和尚欲入涅槃說六度經のペリオ本(二二二七号)テキスト、および勸善經に関する記載は、『疑經研究』に増

補されたものである。

(6) 療病迎福などのための単なる迷信に類する疑經とは譚讖・世術・陰陽・吉凶・神鬼禍福などを説くものであるが、この種のもはとりわけ多く存する。その代表的なものは天地八陽神呪經で、スタイン本のみで三十九点にもものぼる。またウイグル訳も存する。仏說大藏正教血盆經も道教臭の強い特異な内容の疑經であるが、中国・日本でよく読まれた(これにはM・スワミエの研究がある。道教研究第一冊)。そのほか仏說延壽命經(スタイン本二四二八号、ペリオ本二二七二号)、仏說七千仏神符經(ペリオ本三〇二二号)などもある。なお、血盆經以下の記載は『疑經研究』の増補である。

七

第六節では中国仏教における疑經の問題点をとりあげる。前節では疑經が何故つくられるに至ったかを六類型に分ち、それぞれについて若干の疑經を例として解説が試みられたが、本節では、かくしてつくられた大量の疑經のほとんどが何故に湮滅したか、その理由を四点にしぼって考察している。理由の第一は時機相応の、しかも底辺的信仰を併せも

つという疑經自身の性格である。疑經が一期、爆発的な人気を博しても、後に省みられなくなるのは、このマイナスの性格に由来すると見る。明代学僧、雲棲株宏が、父母恩重經を用いることには一利二害があると述べて疑經の依用に消極的だったが、それは疑經のもつこうした性格を喝破したものと見える。

理由の第二は、大藏經が準拠すべき開元録の入藏録から疑經類が排除されたこと。これによって疑經は少数の例外はあるもののほとんどが大藏經の外に押し出された。とくに宋代以後の木版印刷の時代に入ってからはこれによって決定的な打撃を蒙り、特別のもの以外は散佚を余儀なくさせられた。理由の第三は俗講、変文など、民衆教化という点では疑經にとって代わりうるより効果的な方法が考案され、開元ごろからさかんになったこと。理由の第四は―これは特定の疑經が何故、大藏經の内外に残り得たか、その理由をあげたものである―經録撰者は翻訳か否かで真經・疑經を区別しようとしたが、智顛、吉藏、道綽、善導など当代一流の学僧たちは、經説が正しいと思えば真經・疑經の区別に拘泥せず、自由に經証として引用した。したがって筋の通った内容の疑經、たとえば像法決疑經

・觀世音三昧經・淨度三昧經（本書第六章參照）・提謂波利經（本書第四章參照）など、主として六朝の末法思想興隆時代につくられた疑經類などは、經疏への引用を通じて長い生命を保ってきたし、梵網經、仁王般若經、藥師本願經などは真經として入藏され、こんにちに伝えられている。經録撰者の側に、生きた民衆の仏教を理解しようとする努力が不足していたのではないか、というのが著者の一つの感慨にまでなっている。

八

第一章をやや詳しく紹介したら、与えられた紙数に達してしまった。そこで以下に若干の補足を加え、本書の紹介にかえたい。

第二章の中国仏教史と疑經——中国仏教史に対する疑問——も第一章に準じる総括的な論稿であり、疑經の諸問題を第一章とは違う観点から縦横に論じている。この章ではとくに、中国近世仏教史に対する著者の造詣の深さが躍如としている。第十四章の正倉院文書に見える疑經類は石田茂作博士の「支那撰述疑偽經」(『写經より見たる奈良朝仏教の研究』所収)によりながら、その中であげられている三十八部の疑經について敦煌写經などにもと

づく新しい知見を加えて解説したもの。きわめて有益である。なお、本書にあらわれるすべての疑經を網羅した「疑經索引」は、とくに研究者にとって便利なものである。さらに英文の目次および梗概がつけられればこの画期的な研究が外国人研究者にも近づきやすいものになったであろう。

（京都大学人文科学研究所刊、昭51、非売品。B5版、図版十八頁、序・目次八頁、本文四二〇頁、索引五頁）